



令和 8 年度 東京都北区立王子桜中学校

令和 8 年 6 月 第 3 号

校長 阿久津 光生

〒114-0002

東京都北区王子 2-7-1

Tel 03-5902-3155

王子桜だより

共生の精神に満ち、国際的視野に立ち、大きな夢の実現のために限りなく向上に努める人を育てる。

教育目標 自主 創造 飛翔

《祝 北区中学校ソフトテニス研修大会個人戦 準優勝・3位おめでとうございます！》

4月26日（日曜日）北区中学校ソフトテニス研修大会個人戦が、王子桜中学校の校庭で行われ、

男子準優勝 3年生長田・梅原ペア

女子準優勝 3年生屋宮・堀内ペア

第三位 3年生原田・八戸ペア

本当におめでとうございます。

2年生も2つ勝ってベスト16入りも男女合わせて4ペアと大健闘でした。みなさん、本当によく頑張りました。大勢の保護者の皆様に応援に来ていただきまして本当にありがとうございます。



《祝 東京都中学校ラグビーフットボール大会 2部準優勝おめでとうございます！》



東京都中学校春季ラグビー大会が行われました。王子桜中は、獨協中、都立小石川中との連合チームで初戦は4月12日（日曜日）成城学園グラウンドにて成城学園Bに勝ち、2戦目は4月19日（日曜日）明治学院東村山グラウンドで、中武北三日連合に勝ち、3戦目は、4月26日（日曜日）明治学院東村山グラウンドで久我山Bに勝ち、見事決勝トーナメント進出しました。決勝トーナメントでは、5月6日（日曜日）玉川学園大学グラウンドで玉川学園中Bに勝ち、5月17日（日曜日）府中市朝日フットボールパークで千歳中Bと対戦して接戦のうえ惜しくも勝利には至りませんでしたが、準優勝という立派な成績を飾りました。本当におめでとうございます。秋季大会も頑張ってください。応援しています！

《引き渡し訓練を行ないました！》

5月7日（木曜日）引き渡し訓練を行ないました。地震を想定した避難訓練を実施し、14時00分より、各教室にて生徒のみなさんを無事に保護者のみなさまに引き渡す訓練を行いました。

王子小学校、東十条小学校合同で行いました。きょうだいが小学校にいらっしゃる場合には、先に小学校で引き取りを行ってから中学校に来ていただきました。大変ご多用の中、訓練にご協力いただき誠にありがとうございました。



《 第四ブロック春期剣道大会団体戦が開催されました！ 》

5月10日（日曜日）第四ブロック春季剣道研修大会団体戦が立教池袋中学校で開催されました。王子桜中剣道部女子は、板橋区立赤塚一中・二中合同チームと男子は板橋区立西台中学校と対戦いたしました。勝利にはいたりませんでしたが、礼儀作法や、精神統一をした竹刀の一振り、一振りが実に素晴らしかったです。剣道の試合姿がとってもカッコ良かったです！



《 第22回体育祭、クラス・学年・学校が一つになって素晴らしかったです！ 》

5月23日（土曜日）第22回体育祭を行ないました。昨日も雨が降り、校庭の準備もほとんどできない状況でしたが、本日は、雨も上がり、早朝より、係生徒のみなさんが、テントや机、椅子等を運んで準備をしてくれて、本当にありがとうございました。「輝翔勝突（キツカット）～恐れず進め、勝利に向かって～」このスローガンは、体育祭で、勝利を目指す、勝つことだけでなく、学校が一つになること、学年が一つになるという願いもこのスローガンには込められています。自分たちで決めたスローガンをもとに、体育祭を成功させるのだという強い思いで、全ての競技を楽しみながら一丸となって頑張っている姿に感動しました。開会式の立派な開会宣言・選手宣誓から始まり、各競技、学年種目、リレー等全力で取り組む姿がどの学年も立派でした。そして、3年生は、2年生の後半からずっと練習を積み重ねてきた「王桜演舞」の一糸乱れぬ演技は、圧巻で、観ている方全員に大きな感動を与えました。大勢の皆様のご来場いただきまして子どもたちの活躍する姿を最後まで見ていただけて、本当に思い出に残る体育祭となりました。最後になりましたが、運動会開催に当たり、保護者の皆さま、地域ご来賓の皆さま、PTA 役員の皆さま、おやじの会の皆さまに様々な面で、ご支援・ご協力いただきましたことを心より感謝申し上げます。



古河市兵衛と渋沢栄一 その1

飛鳥山の旧渋沢邸の近くに旧古河邸があります。この旧古河邸は、旧古河財閥の創業者である古河市兵衛の実子、三代目の虎之助の邸宅です。では、古河市兵衛と渋沢栄一とは何か関係があるのでしょうか？

古河市兵衛は、1832年（天保3年）京都岡崎村で木村長右衛門と母みよの次男として生まれました。生家は酒屋で代々庄屋でした。幼名は、巳之助（みのすけ）。市兵衛が生まれたころには、生家は没落しており、豆腐の行商をするなど貧しい生活を送っていました。その後、貸金業をなりわいとする親戚のもとで働き、その後、小野組で働くこととなります。小野組とは、江戸時代から明治初期にかけて活躍した近江商人（小野善助）系の有力商人で、生糸や絹の交易、両替商、油問屋などを営んでいました。幕末には三井と並ぶ豪商として台頭し、明治政府の設立時には資金提供もした豪商です。そんな中、市兵衛は、小野組の番頭をしていた江州（現在の滋賀県）の古河太郎左衛門の養子となり市兵衛は、古河を名乗るようになりました。

小野組は明治政府に資金提供した見返りとして公金の扱い業務を担当することとなりました。多額の資金をやりとりする過程で、明治政府から預かった多額の資金を利用し、新たな事業や企業へ、無担保貸し付けをしていました。そんな中、古河市兵衛は小野組でどんどん頭角を現していきます。もともと親戚の貸金業の経験もあったため、日本全国の事業への融資から得た収益を再投資し、生糸、米など手広く商い、さらには東北の阿仁・院内の鉱山経営の責任者となって商才を発揮し、小野組の資産を増やし経営拡大に貢献していたのです。しかし、明治政府は突如、公金の取り扱いに高いお金を課すことを決めました。その担保金を払おうにも、融資により金庫には担保金の支払いに必要なお金がない状態に陥るのです。この苦境の際に、その後の古河の人生に影響を及ぼす企業として関係したのが第一国立銀行でした。小野組は1873年（明治6年）7月、第一国立銀行の設立にも関わっていました。我が国最初の民間出資の銀行で、資本金250万円のうち100万円は小野組が出資していました。このときの総監役（後に頭取）が渋沢栄一翁でした。第一国立銀行は小野組から出資を受けていただけでなく、小野組に多額の融資もしていました。小野組が破綻すると第一国立銀行も連鎖破綻する可能性があったのです。渋沢栄一翁は大いに悩み、苦しみました。しかし第一国立銀行への返済を決意したのが小野組にいた古河市兵衛だったのです。市兵衛が渋沢栄一翁のもとを訪ねてきました。そして、栄一翁に迷惑をかけ、せっかく創設した第一銀行を潰



北区西ヶ原にある旧古河邸 協力 公益財団法人大谷美術館



古河市兵衛肖像

【画像提供：古河機械金属株式会社】



現3年生が昨年1月校外学習で第一国立銀行跡（現・みずほ銀行兜町支店）を見学しました。

すことがあっては、申し訳ないと言って、小野組の倉庫に残る米、生糸など、さらに自分の給金や貯金も全て抵当を差し出しすることを申し出たのです。栄一翁もこの責任感と勇気ある行動に大変感銘を受けました。市兵衛の自分の全てを投げ打った取り計らいで、第一国立銀行は、倒産を免れたのでした。しかし、このことで小野組の本家は潰れ、市兵衛は、無一文になってしまいました。このどん底の中から、渋沢栄一翁から絶大なる信頼を受けて、資金提供を受けた市兵衛は、1875年(明治8年)に草倉銅山(新潟県)の経営に着手し再起したのです。これが古河鉱業(現・古河機械金属)の創業であり、古河グループの創始となったのです。



古河市兵衛銅像

古河市兵衛の銅像古河グループ発祥の地は日本橋室町日本橋室町コレド室町2(室町古河三井ビルディング)の通りの北側で、福德神社の浮世小路を挟んで反対側に古河市兵衛の銅像が設置されています。日本橋室町には、1877年(明治10年)に古河市兵衛が本店事務所を開設したいわば古河グループ発祥の地で、1897年(明治30年)に丸の内に移転されるまで本拠地としていました。本店移転後は私邸となっていました。1917年(大正6年)に古河銀行を設立した際、この地を銀行本店としました。その後、1959年(昭和34年)には旧古河ビルを建設、そして再開発計画により新ビル(コレド室町2)が誕生しました。



本店事務所

【画像提供：古河機械金属株式会社】



日本橋室町コレド室町2(室町古河三井ビルディング)

【画像提供：古河機械金属株式会社】

そして、ついに1877年(明治10年)、市兵衛は、自身の運命に光と影をもたらすことになる足尾銅山(栃木県)購入を決断します。市兵衛の足尾銅山購入については、周囲の者は皆大反対でした。足尾銅山は慶長15年(1610年)備前から来た二人の農民によって発見されたため、備前楯山と呼ばれるようになり、江戸幕府の銅山として栄えました。(楯山とは銅山という意味)その銅は日光東照宮、芝の増上寺や江戸城の屋根や、銅銭(寛永通宝)にも使われましたが、江戸時代にもう掘り尽くされたと言われていたからです。それでも市兵衛は、銅の鉱脈はまだあると信じて、その反対を押し切って廃山同然の足尾銅山を経営するのです。しかし、世間が予想していた通り、荒れ切った銅山の再開発は、新たな銅の鉱脈が見つからず、苦労が報われない年月が過ぎて行きました。全く採算が合わない赤字経営だったので、草倉銅山の利益を充当しながら、信念を曲げず辛抱強く鉱脈発見のために、様々な技術革新に取り組むのです。そして4年の歳月が経った1881年(明治14年)ついに銅の大鉱脈を発見、その後も「大直利」(おおなおり)と呼ばれる巨大な優良鉱脈を次々と発見しました。この大発見により、足尾銅山は急成長を遂げるのです。坑道をさらに拡張し、トロッキを走らせ、照明は油でとり、蒸気ポンプを使い、電話を設置し、電気による銅精錬を用い、水力発電所もつくるなど、新技術を駆使して、大量の銅を産出しました。銅は

70%以上海外に輸出され市兵衛は莫大な富を獲得します。それに伴い、足尾の町は、5万人の人口で、宇都宮に次ぐ栃木県第2位の都市にまでなったのです。鉱山の坑夫たちが飲食する店が軒をつらねて、この時代に電信・電話・電燈があり、鉄道、学校、警察署、郵便局等もあり、地方の首たる都会においてすら見られない施設、諸機関が備わっていきました。そして足尾銅山は、国内全生産銅の40%以上を産出する日本一の銅山となったのです。さらに市兵衛は、足尾以外にも、阿仁銅山、院内銀山など数多くの鉱山を発展させ、「鉱山王」と称される一大実業家となったのです。市兵衛のモットーとしていた「運・鈍・根」の精神である、「運を天に任せ、愚直に、根気よく取り組む姿勢と信念」こそが、無一文からはじめて古河財閥の基礎を築いていったのです。しかし、市兵衛はやがて未曾有の事件の渦中の人物となってしまうのです。



足尾銅山観光 栃木県日光市足尾町

400年の歴史を誇り、かつて「日本一の鉱都」と呼ばれ大いに栄えた足尾銅山の坑内観光施設です。閉山後に坑内の一部が開放され、トロッキ電車に乗って全長約460メートルの薄暗い坑道に入っていくと、当時の辛く厳しい鉱石採掘の様子が年代ごとにリアルな人形で再現されています。鉱石から銅になるまでの過程などが展示されている銅資料館と、足字銭の鑄造過程が展示されている鑄銭座も併設されており、日本の近代化を支えた足尾銅山の歴史や役割を学ぶことができます。



【写真協力：足尾銅山観光】